

《研究ノート》

明治期における埼玉県の産業的位置の推移

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 府県別・地方別推移の概要
  - (1) 府県別動向の概要
  - (2) 地方別動向
- 3 埼玉県の産業的位置の推移
  - (1) 1888（明治21）年の埼玉県産業の位置
  - (2) 1919（大正8）年の埼玉県産業の位置
- 4 東京集中と関東諸県の動向
  - (1) 関東諸県の産業の推移
  - (2) 東京集中と関東諸県の動向

1 はじめに

明治期の産業発展にともなう地域的な産業構成・編成を府県単位で検討することの一環として、すでに、まず、始点の時期の状況として「明治二十一年農事調査」によって1888（明治21）年の府県別物産状況を検討した。<sup>(1)</sup> ついで、1919（大正8）年について、「工場統計表」「農商務統計表」によって検討し、1888（明治21）年以降の発展の状況を把握した。<sup>(2)</sup>

府県によるその位置の変動はかなり大きい、従来からの兵庫と、上昇著しい大阪、東京とは対照的に多くの県が低下していく。その一つに東京周辺の関東諸県がある。ここではそれが最も著しい埼玉についてその動向を素描

する。

## 2 府県別・地方別の概要

### (1) 府県別動向の概要

この兩年の府県別の物産額をみると、つぎのようになる。

1888年は、最大は長野で全国の6.3%で、ついで兵庫5.0%、埼玉4.1%、千葉3.9%、東京3.8%、新潟3.6%、福岡3.6%、茨城3.4%、福島3.4%、京都3.3%となり、これらが上位10府県である。ついで、第11位以下として、神奈川3.1%、栃木3.0%、岡山2.9%、山口2.7%、群馬2.7%、大阪2.7%、滋賀2.6%、三重2.4%、広島2.4%、愛媛2.4%などとなる。

1919年には、第1位は大阪で全国の10.0%、ついで兵庫は8.2%、東京7.1%、愛知5.7%、長野3.9%、神奈川3.3%、福岡3.1%、静岡が2.6%、岡山2.5%となり、これらが上位10府県である。11位以下は京都2.4%、広島2.2%、三重2.2%、新潟2.1%、愛媛2.0%、埼玉1.9%、群馬1.9%、熊本1.9%、福島1.8%、茨城1.8%である。

この間、1888年には最大の長野と最下位の宮崎とは、前者が後者の6.8倍であったが、1919年には最大の大阪と最小の沖縄とは、前者が後者の16.7倍となり、この間に府県間の格差が拡大した。

1888年には長野の大きさが目立ち、埼玉、千葉、茨城、そして神奈川、栃木があるというように関東諸県、それに接する福島などの大きさが目につき、他方、兵庫は大きいが大阪はまだ相対的に小さかった。それが、1919年には大阪が第1位となり、兵庫、東京、1888年には欠落していた愛知、そして長野、神奈川、福岡が上位となった。

### (2) 地方別動向

このように、この間の生産額の府県別推移はかなり大きかった。それにも

第1表 地域別および関東諸県の物産額における占有率の推移 1888年・1919年

		物 産		工 産		農 産	
		1888年	1919年	1888年	1919年	1888年	1919年
地 域 別	東 北	12.0%	8.0%	10.4%	3.4%	12.6%	14.6%
	関 東	24.0	23.1	28.3	25.5	22.4	20.0
	中 部	21.8	18.5	24.9	16.2	20.9	21.8
	近 畿	17.6	29.4	21.1	39.7	16.3	15.2
	中 国	10.9	8.6	8.6	5.9	11.5	12.3
	四 国	4.0	4.0	3.4	3.8	4.2	4.3
	九 州	9.9	8.4	3.2	5.7	12.1	11.9
全 国		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
関 東 府 県 別	東 京	3.8	8.4	9.8	13.5	1.2	1.3
	神奈川	3.1	3.9	4.4	5.5	2.5	1.7
	茨 城	3.4	2.1	1.9	0.56	4.1	4.4
	栃 木	3.0	2.0	3.7	1.5	2.8	2.7
	群 馬	2.7	2.3	2.9	2.1	2.7	2.6
	埼 玉	4.1	2.3	3.3	1.5	4.7	3.6
	千 葉	3.9	2.1	2.2	0.75	4.4	3.7
そ の 他	大 阪	2.7	11.8	2.8	19.0	2.7	2.1
	兵 庫	5.0	9.7	7.3	13.7	4.1	4.1

註1) 『明治二十一年農事調査』にみる産業の府県別状況(本誌前々号)付表I, および「1919(大正8)年の産業の府県別状況」(本誌の前号)付表Iより作成。  
 2) 北海道, 愛知, 和歌山, 高知, 熊本, 鹿児島, 沖縄を除く39府県についてのものである。

とづく地方別をみると、第1表のようになる。この間の物産額の増加は著しいが、地方別にみてウェイトをたかめているのは近畿のみで、そのほかは同一の四国を除き減少している。ウェイトの低下は東北が最も顕著で、ついで中部と中国である。東京をふくむ関東も24.0%から23.1%へと僅かではあるが減少している。近畿の17.6%から29.4%への増大はきわめて際立った動向である。

このウェイトが低下している関東地方は、そのうちの東京と神奈川がウェイトをたかめ、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉は低下している。東京・神奈川は6.9%から12.3%へと増加しているなかで、その他の関東5県は17.1%

から10.8%へと大きくそのウェイトを低下せしめている。その度合は東北地方に匹敵するほどである。

この物産額を工産と農産別にみる。

この間に工産は1億3576万8696円から59億4058万1908円へと増大し、農産の3億0763万3846円から41億0525万2264円への増大を実額においても増加率においてもはるかに上回っていて、この間の物産拡大の牽引となったことはないまでもない。この工産の地方別ウェイトをみると、これまた近畿が21.1%から39.7%と顕著に増大しているほか、四国、九州でも高まっている。その他の地方は低下しているが、東京・神奈川をふくむ関東も低下しているのである。

関東地方では、東京・神奈川をあわせて14.2%から19.0%へと増加しているが、その他の関東5県は14.0%から6.4%へと大きく低下しているのである。その度合は東北地方につぐ大きさである。

農産では、関東、近畿、九州がウェイトを低下、東北、中部、中国が高まっているが、東北がやや大きいことを除き大きな変化はない。こういうなかで、注目すべきは、茨城を除き、その他の関東諸県は低下していることである。

今日の東京の三多摩分は1888年には神奈川に属し、1919年には東京に属しており、この間の東京の増大の小ささは、実質的には低下とみてよいであろう。

このように、東京・神奈川のほかの関東諸県は工産においてはすべてが、そして農産においては茨城のほかはいずれもそのウェイトを低下せしめているのである。

### 3 埼玉県の産業的位置の推移

#### (1) 1888（明治21）年の埼玉県産業の位置

全国第3位というこの埼玉県の大きさはなによりも農産によっている。それは1441万6843円で、これは全国農産額府県別第1位である。農産の構成は米31.0%、麦21.5%、大豆9.3%、桑葉28.8%、繭20.1%などである。米が最大であるが、全国の米生産の2.9%で、全国第16位にとどまる。これに対して麦は全国の8.6%で、第2位の茨城の6.6%をはるかに上回る抜群の大きさである。

大豆も全国の12.2%を占める第1位で、第2位の茨城の10.1%とともに抜群の大きさであり、甘藷は長崎10.4%につぐ9.2%という大きさである。このような食料作物のみでなく、桑葉は全国の18.6%を占める第1位の生産があり、また繭も全国の10.5%で、長野、群馬、福島諸県につぐ大きさにある。

県民1人あたりの農産額を算出すると、13円58銭6厘となるが、これはわが国府県中最大である。

埼玉県はわが国最大の農産県であるが、県産額の農産のウェイトは新潟、福岡、茨城の諸県より小さい。それは工産が大きいことによる。

工産は451万1219円であるが、これは全国第9位である。この「農事調査」においては工産は総額のみでその種類別はない。埼玉県の生糸と、『第5次農商務統計表』の1888（明治21）年度の府県別織物生産高にある織物の生産額をみると、生糸は全国の4.6%、織物は全国の6.2%である。生糸は第7位、織物は第3位の大きさである。「重要物産」欄には工産物として織物・製紙・鋳物があり、製紙、鋳物が生糸、織物などとともに工産物を構成していた。

このように、埼玉県はわが国第1の農産を基盤に、農産加工業を展開して、豊富な物産を産出している。100万を越える人口をかかえるが、人口1

人あたりの物産額は17円91銭7厘で、これは全国平均の13円5銭3厘を大きく上回るもので、全国第4位である。埼玉はわが国有数の産業雄県なのである。

## (2) 1919（大正8）年の埼玉県産業の位置

このような埼玉県であるが、その後の位置をみよう。

このたび刊行された『埼玉県史料叢書8 明治期産業土木史料』の解説において、明治期の埼玉県の産業について、①埼玉県は全国でも有数の農業県であったこと、②そうしたなかにおいても明治期を通じて着実に工業生産が伸張したこと、③農業は稲作と多くの地域での養蚕業があり、基本的に「米と繭」の経済構造であったこと、④各地に特徴ある機業があり、また製糸業が展開し、在来産業が展開したこと、⑤一部に近代産業の生成がみられたこと、などと記されている。<sup>(3)</sup>

この的確な特徴づけに指摘されているように、農業においても生産の増大があり、そして多様な在来産業の発展、近代工業の展開がみられたことはいうまでもない。ここでは、このようにそれ自体としては発展した埼玉県の産業の全国的位置を検討したい。

先に『第36次農商務統計表』と『大正8年工場統計表』によって1919（大正8）年の農産額、水産額、工産額の府県別把握を行なった。全国生産額は農産41.4%、水産2.2%、工産56.5%である。工業化が大いにすすんだ。府県別には大阪、兵庫、東京、愛知、長野、神奈川、福岡、北海道、静岡、岡山が上位10府県である。愛知県と北海道は「農事調査」にはなかったもので、これを除外すると、京都府、広島県が上位10県に入る。かつての上位県であったもののうち、埼玉、千葉、新潟、茨城、福島は低下した。埼玉県は全国の2.3%で17位、愛知県、北海道を除くと15位で、大きく後退した。上位が工業県であることはいうまでもないが、埼玉県は工産物は15位となった。農産も12位となった。人口1人当りは215円23銭となり、全国平均の212円28

銭よりはやや大きいものの、愛知県・北海道を除外しても全国20位という位置である。農産も相対的に停滞的である。

工業の状況をみよう。

1919（大正8）年の埼玉県の工業の部門別構成は、染織69.7%，機械7.3%，化学3.6%，飲食物9.4%，雑9.9%，特別0.09%である。全国はそれぞれ49.3%，15.9%，14.2%，10.8%，6.7%，3.1%である。全国と比較して、染織の大きさが顕著で、また、雑が大きい、その他の部門は全国を下回る。

染織のうちの製糸は44.0%，織物は23.5%で、全国のそれぞれ12.4%，20.1%を上回る。しかし紡績はゼロである。

全国産額中のウェイトは、染織は1.8%，うち製糸は4.6%，織物は1.5%で、製糸第5位、織物第16位という位置である。1888（明治21）年には、製糸は4.6%，第7位、織物は6.9%，第3位であったのと比較すると、ことに織物の低下が著しい。

この織物の大きい低落は、しかし、留意すべきことがある。1888年は「農商務統計表」によっているのに対し、1919年は「工場統計表」によっているからである。後者は職工5人以上の工場についてのものであるが、前者はすべての織物業を把握している。そこで、『第36次農商務統計表』により織物を見る。それによると埼玉の織物生産額は、6501万5155円で「工場統計表」による2069万6670円よりはるかに大きい。全国の織物産額は、「工場統計表」では13億7553万3708円であるが、「農商務統計」では20億0074万3498円である。埼玉のウェイトは、3.2%となり、また、全国では第8位となる。職工5人未満をもふくめた全製造所での生産高ということになれば、このように、その位置はたかい。しかし、1888年には全国の6.9%，第3位であったのと比較すると、大きく低下している。そして、職工5人未満製造所が多いということは、家内工業のウェイトが大きいことであり、工場工業化ということからみて大きくとり残されていることを意味している。このように、最大の工産物

である織物業は大きく停滞しているのである。

1919年に最大の工産物である製糸は、「農商務統計」では、5199万8555円で、全国9億5273万2268円の5.5%となる。この製糸においても職工5人未満製糸場が多いということになる。釜数10未満にあらわれるのである。

かなり大きいウェイトを占める雑工業部門は、870万7248円のうち、808万8416円が裁縫製品で、さらにその中の777万6923円が足袋である。

ついで農業の状況はつぎのごとくである。

1888年には全国第1位の農産額の埼玉は、1919年には全国第12位となった。構成は、米45.0%、麦11.8%、繭28.4%、大豆3.6%、甘藷4.7%、馬鈴薯4.4%などである。1888年は、米31.0%、麦21.5%、繭20.1%、大豆9.3%、甘藷4.7%、桑葉28.8%であったので、この間に米、繭のウェイトがたかまり、麦、大豆のウェイトが低下した。桑葉の項目がなくなっているの、1888年についてこれを除外して計算しなおすと、米43.5%、麦30.2%、繭28.2%、大豆13.0%、甘藷6.6%となる。米、繭は微増で、麦、大豆、甘藷のいずれもが低下している。

この埼玉の農産物のなかで大きなウェイトを占め、それが低下した麦、大豆、甘藷の全国産額中の占有率は、1888年は麦8.6%、大豆12.2%、甘藷9.2%であったが、1919年には麦3.96%、大豆5.4%、甘藷3.8%となった。大豆は全国の11.6%という抜群の大ききの北海道などを差し引いた39県でも7.0%である。

以上のことから、1888年段階の埼玉の農業を特徴づけた麦、大豆、甘藷のような畑作物が停滞しているといえる。

この埼玉県の特有の畑作物の動向に関わって、「埼玉県誌資料」につきのような記述がある。<sup>(4)</sup>

大豆

大豆ハ本県農産物中ノ第三位ヲ占ムル重要作物ニシテ、亦県下致ル所ニ之ヲ産

ス、就中産出額ノ最モ多キハ北埼玉・南埼玉ノ二郡ニシテ大里・入間・北足立・比企ノ四郡之ニ次グ、而シテ大豆ノ用途ハ極テ広ク、味噌・醤油ノ原料及家畜ノ飼料ニ供セラル、ノ外、従来農家ハ作物ノ肥料トシテ大豆ヲ施用シ来リタレトモ、近年滿洲地方ヨリ大豆粕ノ輸入セラル、ニ当リ、利益上ノ見地ヨリ漸次之ニ代フレニ至リタルノミナラズ、乾田ニ毛作及桑園ノ畦間ニ緑肥用青刈大豆ノ栽培隆盛ヲ致シ、現今ハ大豆ヲ肥料トシテ直接ニ使用スルノ習慣殆ンド其ノ跡ヲ絶ツニ至レリ、而シテ本県産ノ大豆ハ各府県ノ大豆ニ比較スルトキハ其品質概シテ中位ニアリト雖、種類ノ雜駁不統一ナルヲ欠点トス 98頁

### 甘藷

甘藷ハ管下各郡ニ亘リテ多少ノ産出アラザルハナシト雖モ、北足立・入間ノ二郡最モ多ク南埼玉・秩父ノ二郡之ニ次ク、品種ハ種々アレトモ紅赤・オイラン・川越等味佳良ニシテ収量最モ多キガ故ニ広く栽培セラル、而シテ維新ノ初期未タ交通機関ノ発達セザル時代ニ於テハ、其ノ販路概ネ東京市ニ限定セラレタリシカ故ニ、今尚川越甘藷ノ名声ハ市中轟ケリ、然カルニ交通機関ノ発達ニ伴ヒ、奥羽・北海道等気候寒冷ニシテ甘藷ノ栽培ニ適セサル地方ニ於テ盛シニ需要セラル、ニ至レリ、価格モ自ラ騰貴シ栽培面積逐年増加ノ趨勢ニアリ 99頁

甘藷については、鉄道によってその販路を拡大している。大豆は、その用途の一つである肥料としての大豆については、大豆粕の輸入という輸入圧と、青刈大豆での利用という施肥法の変化によるとしている。しかし、大豆の生産そのものは増加している。1919年の大豆の主要生産県は、北海道11097万7902円、岩手766万7478円、茨城587万2997円、福島531万1718円、となった。埼玉は第5位である。1888年は北海道は記載なく不明であるが、この北海道、岩手、福島が増大し、埼玉が停滞するというような府県間の伸張度の相違の結果でもある。

## 4 東京集中と関東諸県の動向

### (1) 関東諸県の産業の推移

関東諸県のうち、1888年に埼玉とともに上位にあった千葉、茨城について概観しよう。

#### 千葉県

千葉は、1888年には物産額1808万3212円で全国第4位、全国の3.9%を占める産業雄県であった。人口も118万余で7番めという大県で、県民1人あたりでも15円33銭2厘で全国をかなり上回り、全国第11位である。

物産のうちわけは、農産が1340万4525円で全国第3位、全国の4.4%、水産が165万8219円で全国第1位、全国の10.0%という、有数の農水産県である。物産構成は農産74.1%、水産9.2%で、工産は16.7%にとどまる。

農産は米が全国の4.6%で、新潟、兵庫につぐ全国第3位、麦が全国の4.7%で、埼玉、茨城、群馬につぐ第4位という有数の米麦産出県である。さらに、大豆は全国の7.4%で埼玉、茨城につぐ第3位、甘藷は全国の8.2%で、長崎、埼玉、愛媛につぐ第4位というように普通農産物の産出県である。粟は神奈川、福岡につぐ。しかし、繭、桑葉は小さい。このように、米麦、そして畑作物が多く生産されている農業雄県で、県民1人あたり農産額は11円35銭8厘で、全国第5位という大きさである。全国の水産の10.0%を占め、わが国第一の水産は、乾鰯、鰯搾、鯉節などを産する。

このような農産・水産とは異なり、工産は全国の2.2%、第15位である。工産のうちで生糸、織物ともに小さく、両者合せて千葉県の工産の2.6%を占めるにすぎない。97.4%が其他であるが、「重要物産」欄には酒、醤油、味噌、炭があげられている。全国の11.6%を占める最大の醤油産地で、これに酒類が加わった醸造が最大の工産であると思われる。そのほかは雑多な農産加工であったであろう。このように工産は小さいが、有数の農産・水産によって物産額は大きく、農産・水産によって千葉県は有数の物産県となって

いるのである。

この千葉は1919年にはつぎのようになる。2億0974万4766円の物産額は全国物産額の1.7%の大ききで、これは全国第21位である。1888年との対比でいえば、上位中の愛知、北海道、愛媛を除外すると、全国の2.1%、第18位である。その位置は大きく低下した。

農産は1億5368万4962円で、全国の3.1%、全国第7位、水産は1億1180万8754円で、全国の4.6%、第4位、を占めるが、工産は0.65%にすぎない。1888年と同じ39府県でも、それぞれ3.7%、第6位（愛知を除いて）、6.8%、第3位（北海道を除いて）、0.75%にとどまる。構成上は農産73.3%、水産5.6%、工産21.1%である。この工産の小さきが、その地位を低位としている。

農産は米が全国の3.2%、39府県では3.8%で、全国第7位、愛知を除いて第6位、麦は全国の3.5%、第8位で、一定の大ききであるが、その位置は低下している。

食用農産物の大豆、落花生、甘藷などの畑作物が大きき、落花生はわが国第一である。しかし、大豆は全国の3.7%、第10位、39県では4.7%、第7位で、1888年と比較して大きく低落している。繭は小さいことはかわらない。県民1人あたり農産額は115円02銭で、全国89円47銭4厘を上回るが、それは全国第11位で、1888年と比較して低下している。

水産は北海道、長崎、山口につぐ第4位であるが、大きく低下している。

工産のなかでは、飲食物部門が全国の4.4%を占めて、第8位であることを除き、他部門はきわめて小さい。この飲食物部門では、醤油が1900万7493円で、全国醤油生産の実に32.4%を占める。そのほかでは酒類である。

工産が小さき、大きなウェイトを占める農産と水産も全国的には停滞的で、その結果、県民1人あたりは156.976円で、全国平均を大きく下回るにいたった。

茨城県

茨城は、1888年は物産額1576万1277円で全国第8位、人口101万余人、第6位の雄県である。この茨城は、全国で第6位の農産額で、全国の4.1%を占め、県物産額中の農産の割合は80.5%で、上位府県では福岡につぐ農産県である。構成は、米43.1%、麦18.8%、繭2.6%、大豆8.8%、蕎麦1.1%、甘藷2.2%、葉煙草2.2%である。全国の3.5%を占める米が最大のものであるが、そのウエイトは43.1%で全国の51.0%を下回り、それ以外が大きい。麦は全国の4.7%第5位、大豆10.1%、第2位で埼玉とともに抜群である。甘藷は全国の3.8%、第9位、そして蕎麦、青芋、小豆もそれぞれ第2位という食用普通農産物が大きい地位を占めている。このような普通作物とともに煙草は全国の11.9%を占める全国第一の産地であり、また棉も全国の6.8%を占める第6位の、関東では最大の産地である。県民1人あたりの農産額は12円51銭8厘で、上位県では埼玉につぎ、物産上位12位栃木の12円67銭につぐ全国第3の大きさとなっている。まさに農業雄県である。

他方、工産は大きくない。主要なものである生糸、織物は幾分はあるが、ともに小さく、其他が中心である。「重要物産」欄には、酒・醬油・味噌など醸造物、製紙、刻煙草、凍蒟蒻、粟野塗、笹などのほか石材類があげられている。工産は小さくなく、県民1人あたり工産は2円59銭3厘と小さい。農産の大きさにもかかわらず、この工産の小ささにもかかわらず、農産の大きさが、茨城県は15円55銭7厘と全国でも上位の大きさである。県民1人あたり物産額の大きさをもたらしているのである。

この茨城の1919年の物産額は2億1887万8503円で、全国の1.8%で、20位である。1888年との対比でいえば、上位中の愛知、北海道、愛媛を除外すると、2.1%、17位である。1888年と同じ39府県では、農産4.4%、工産1.8%、水産0.56%で、1919年には水産、工産は低下したが、農産は微少であるが増加している。東京・神奈川を除く関東5県のなかで唯一農産の全国に占めるウエイトが低下しない県である。

構成上は農産83.3%、水産1.4%、工産15.9%で、1888年より工産のウエイ

トが低下し、農産のウェイトがたかまっているのである。

農産の構成は、米57.0%、麦10.6%、繭13.7%、大豆3.2%、蕎麦7.2%、甘藷3.8%、葉煙草4.2%などである。米は全国の3.6%、39府県では3.8%であり、1888年の3.5%よりたかまっている。1888年と比較して、米、繭、蕎麦、甘藷、葉煙草のウェイトが大きくなり、麦、大豆が小さくなった。

工産のなかでは、構成では、機械21.8%、飲食物30.3%と全国の15.9%、10.8%を大きく上回る。飲食物部門では、酒類と醤油が一定の大きさであるが、機械は鋳物類がある程度あるものの大きくない。染織がかなり小さいことなどが、機械などのウェイトを押し上げているのである。それほどに工業の展開がないところである。

農産は全国中のウェイトが僅かではあるがたかまわっていて、県民1人あたり農産額は135円01銭2厘で全国第1位となった。工産が小さく、その結果、県民1人あたりは162円08銭4厘で全国平均を下回るにいたった。全国における位置は第10位から第32位、39府県では第29位に低下した。

関東地方の諸県は、東京・神奈川を除き、その産業的地位を低下せしめている。その多くが農業雄県であった。工業のウェイトは大きくなかったところはもちろん、在来諸産業を展開していた埼玉の場合でもその後の工業の展開は相対的には停滞的であった。この工業化の遅滞が物産的停滞をもたらした。それとともに注目すべきことは、農業における状況である。関東地方は畑作が卓越していて、ここでは多様な畑作物が生産されていた。その代表が大豆である。「用途ハ極テ広ク、味噌・醤油ノ原料及家畜ノ飼料ニ供セラルノ外、従来農家ハ作物ノ肥料トシテ大豆ヲ施用シ来リタ」という大豆は、その用途の一つである肥料としての大豆については、大豆粕の輸入という輸入庄と、青刈大豆での利用という施肥法の変化によるとしている。しかし、わが国の大豆の生産そのものは増加している。1919年の大豆の主要生産県は、北海道、岩手、茨城、福島、埼玉であるが、埼玉は第5位である。茨城は関東地方であるが、ここを含めて、東北地方において発展しているが、このよ

うな府県間の伸張度の相違によって関東地方の大豆生産は停滞しているのである。

この大豆に典型的に示される畑作物の動向が重要である。

## (2) 東京集中と関東諸県の動向

大阪、東京、兵庫などの大都市府県における工業の展開による発展の蔭に、多くの県が相対的に後退していった。1918（大正7）年末の埼玉県の前住人口は139万1712人で、1888（明治21）年から33万0562人、31.2%の増加である。全国（農事調査に掲載されていない8県分は除外）は40.1%の増加率であるので、それを下回っている。ちなみにその年の埼玉県の前住人口の対本籍人口指数は95.9である。人口流出がすすんでいるといえる。

1920（大正9）年の第1回国勢調査によると、東京府の人口は369万9428人

		東京府人口の出生者	構成比	各府県人口	東京府人口中の 当該府県出生者 対当該府県人口比
東京府人口		3,699,438	100.0		
出 生 府 県	東京府	1,953,764	52.8	3,699,428	52.8
	東京府以外	1,727,669	46.8	52,263,625	3.3
	神奈川県	106,311	2.9	1,323,390	8.0
	埼玉県	189,216	5.1	1,319,533	14.3
	群馬県	69,938	1.9	1,052,610	6.6
	千葉県	179,435	4.9	1,336,155	13.4
	茨城県	116,798	3.2	1,350,400	8.7
	栃木県	88,473	2.4	1,046,479	8.5
	小計	750,171	20.3	7,428,567	10.1
	新潟県	143,826	3.9	1,776,474	8.1
	長野県	69,696	1.9	1,562,722	4.5
静岡県	63,292	1.7	1,550,387	4.1	

註1) 『大正九年国勢調査報告 府県の部第1巻東京府』より作成。

であるが、主要出生地は第2表のようになっている。東京府生れは1953万3764人で、東京府人口の52.8%で、他府県生れが172万9669人、46.8%である。この他府県生れの最大は埼玉で、18万9216人で、東京府人口の5.1%を占める。ついで千葉が17万9435人、4.9%、新潟が14万3826人、3.9%、茨城11万6798人、3.2%、神奈川10万6311人、2.9%、栃木8万8473人、2.4%、群馬6万9938人、1.9%、長野6万9696人、1.9%が上位である。新潟、長野のほかはすべて関東で、関東のすべてが上位である。関東諸県の合計は、75万0171人で、これは東京府人口の20.3%となる。すなわち、東京府人口の5人に1人が関東諸県生れということになる。

他方、この東京にいる他府県人口の自府県人口のどの程度の割合にあたるかといえば、東京府以外諸県人口は5226万3625万であるが、東京府居住他府県人口は3.3%となる。関東諸県の府県をみると、埼玉14.3%、千葉13.4%、茨城8.7%、栃木8.5%、神奈川8.0%、群馬6.6%、で、関東全体では10.1%となる。

以上のことは、東京は関東諸県からのはげしい人口吸引を行なっているということを示すものである。

東京という大都市に隣接・近隣の諸県は、神奈川を除いて、いずれも東京の伸張とともにその産業は相対的に停滞していく。もともと東京との関係が大きかったが、鉄道網の形成によって東京との結びつきは至近となった。人口動向にみられる人的資源の吸引などの諸資源の吸引により、そのエネルギーを東京に吸引されるかのごとくである。<sup>(5)</sup>

埼玉県産業、そして千葉、茨城などの他の関東諸県の産業の動向は、隣接、あるいは近隣する東京との関わりでのそれであるといえよう。

註

- (1) 『明治二十一年農事調査』にみる産業の府県別状況『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第4号 1996年3月

- (2) 「1919（大正8）年の産業の府県別状況」『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第1号  
1996年6月
- (3) 埼玉県教書委員会編『埼玉県史料叢書8 明治期産業土木史料』1996年 埼玉県  
3～11ページ。
- (4) (3)と同一書98・99ページ。
- (5) 1903（明治36）年度の全国高等学校の中等学校別受験者・合格者数状況をみると、東京は全国抜群で、それに対して、関東諸県はきわめて低位である。東京の中等学校は高等師範附属、府立第一・第四を除き、ほかはすべて私立中等学校である。東京周辺の若者が東京に吸引され、私立学校へ人材が吸収されているように思われる。この年の高等学校受験・合格状況の詳細は、神立春樹「明治三十六年全国高等学校入学試験状況—旧々山口高等学校の進退窮するをみる—」『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第1号  
1995年6月。